

樹木医の視点で剪定をする庭師さん

千刈石塚造園



代表 石塚義教氏
柏崎市大字上田尻4509
Tel・Fax.23-1394

めていた国鉄（現JR東日本）で臨時職員として働きはじめ、翌年、正式に職員となった。

国鉄では、列車の安全運転を保つ運転制御や、踏切など信号保安設備のメンテナンスに長年従事された。

五十代半ばで退職されるまで、十回ほど県内での転職を経験。そのうち半分は単身赴任されていたとのこと。転職の伴う仕事は大変だなと、あらためて痛感。

かねてから盆栽や庭いじりが趣味だったこともあり、退職後は造園業をやろうと決意。新潟テクノスクールの造園科で仕事の基本を学び、平成十三年九月、晴れて千刈石塚造園を開業した。この千刈（せんがり）とは何だろうと思ひ質問。「自宅があるのが大字上田尻字千刈。ここから取りました。〇〇造園が一般的ですが、市内にいくつも造園屋さんがあったことから、お客様に覚えてもらえるような名前にしました」とのこと。

開業されて今年で十八年目。この間のご苦労を伺った。「自分の仕事が正しいのかどうか。造園屋で修業をしたわけではないので、悩みながら考えながら仕事をしてきました。講習会や研修会に積極的に参加し、

自己研鑽することで、技術の向上に努めてきました。ありがたいことに、ご紹介のお客様が増えて今に繋がっています」。

石塚さんは樹木医の顔も持つ。柏崎では二人しかいないそうだ。「時期や箇所を見極めて、剪定するかしないかを決めていきます」と、樹木医の視点で剪定をされている。

この先事業をどのように進めていきたいかを伺った。「現在私と若手の二人でやっている。若手が成長して一本立ちすることが楽しみです。自分も体が動くうちはまだまだがんばらないと」。

ご家族はお母様と奥様、三人の息子さん。お孫さんは八人おられるそうだ。今は仕事が忙しく、趣味の盆栽や絵画、山菜取りに時間が割けないそう。温厚なお話ぶりから、誠実なお人柄が伝わってきた。

（編集委員 飯・飯取材）



例年になく暑い日が続いた六月下旬、上田尻にある千刈石塚造園代表の石塚義教さんを訪ねた。事務所や店舗で取材させていただくのが通常だが、今回は現場に伺う初めてのケースだった。

石塚さんは昭和十九年一月生まれの七十四歳。現在のご自宅兼事務所がある上田尻で生まれた。田尻小、田尻中（当時）、柏崎工業高校と進学され、高校卒業後は、群馬県安中市にある東邦亜鉛（株）安中製錬所に勤めた。製錬所の主な仕事は、鉱石から様々な成分を抽出することだそう。当時は高度経済成長時代ということもあり、特に電子部品に使われる材料としての高純度金属の需要が多く、忙しかったそうだ。

その後、お父様が亡くなられたことから柏崎に戻り、当時伯父様が勤